

教育科学研究会通信

京都(関西)教科研例会案内 351 号

5 月号



疎水インクライン跡

日時 2022 年 5 月 21 日 (土) 18 時半～(時間変更注意)
場所 乙訓教育会館 (ZOOM 同時開催) ハイブリット開催
内容 第 334 回 5 月京都教科研例会

提起

不登校の現在

-教育 5 月号第 1 特集から-

提起 大西真樹男(事務局)

5 月は第 1 特集を中心に不登校の現在について考えてみます。
みなさんの参加をお待ちしています。4 月から ZOOM とリアル両方で開催しています。
ZOOM 参加希望の方は連絡ください。URL 送信します。

351 号目次

| | | | |
|---|------------------|------|----|
| 1 | 5 月例会案内 | | 1 |
| 2 | 4 月例会の報告 | 吉益敏文 | 3 |
| 3 | わたしの研究ノート(14) | 佐藤年明 | 7 |
| 4 | 教科研、これまでこれから(13) | 中尾忍 | 11 |
| 5 | 会員投稿 | 岸本清明 | 15 |
| 6 | 編集後記・ニュース | | 16 |
| | 第 12 回関西教科研案内 | | |

京都教育科学研究会第333回4月例会の報告

はじめに

4月例会は特集を手がかりにしつつ、京都教科研30年の歩みも振り返り、今後の方向を模索しました。ZOOM同時開催を試みました。最初に参加者の問題意識を語ってもらいました。香川県 三重県からの参加がありました。比較的オンライン環境が混乱なく進行できました。次回はさらにオンラインの環境を工夫したいと思います。

提起

民間研・サークルで学び、つながる

-第2特集 梅原論文を中心にして-

提起 吉益 敏文

討議 参加者の問題意識(要旨)

- 梅原・寺尾論文 同時代史として読んだ。行政の圧力 今は話にくいのかもかもしれない。
- 若い教師の参加状況 よくわかる。厳しい状況よくわかる。京都の30年の苦労しりたい。
- 民間研の苦労 研究会の重み サークル 京都の歴史はどうだったのか。
- 梅原論文 中尾論文紹介 組合とサークルのつながり 共感 他の方の論文も面白い
- 安心して自然体 (藪内)(寺尾)若い人の感覚がいい。
- 子どもにとって学びとは何か 考えてみたい。梅原論文 民間研の学び 管制に対して批判的 民間が公共性を作っている。
- 教科研 はなしやすい 社会教育の分野に接近している。
- サークルが若い人の身近にない。若い人はどこで学んでいるのかなと思う。
組合が減っているのと同じ時期にサークルも下火になっている。必要性を訴えても若い人に届くのか。インターネットに情報がすぐわかる。集まる必然性は何か
- 現場からの報告から感想 藪内報告 よくわかる。大田実践 試行錯誤よくわかる。教科研で学ぶ中での成長がよくわかる。サークル同志の交流 教育サークルいいものだ。寺尾論文インパクトが強い。土曜日曜にサークルに参加するのは大変だ。普通の良心的教師の参加は難しい。どうすればいいのか。ベテランOB 大田さんと寺尾さんのスタンスの違い 民間研の広がり一つの要因なのか。金間さんの小さいころの出会い 新鮮
- 死と向き合うというテーマ 87歳 死を意識する中で、サークルと今を考える。相手から学ぶ、つながる意味 若い人の意識は。改めてドイツと比較して戦争責任の曖昧さを感じる。人間の内面を考える思想を深めたい。戦争責任を問う事を考えたい。プーチンの蛮行 今こそ考えなければならない。怒りが出てくる。本音を語る意味が例会にはある。

連絡・交流・確認事項

◆5月例会

5月21日(土)6時半～ 不登校の現在 提起 太西

対面とZOOM開催の両方で開催します。ZOOM参加希望の方は吉益まで連絡ください。完全なハイブリット型開催ではないので、マイク機能などが不十分です。会場参加の方の討議、発言が聞きとりにくいかもしれません。4月より環境を改善したいです。連絡をいただいたらURL送ります。

◆6月関西教科研集会(別紙参照) 昨年の 奈良大会講座の幻の企画の再現です。

6/18(土曜日) 午後1時～ 奈良教育大学附属小学校

山崎隆夫・平井美津子：ミニ講演と対談

テーマ 教師の魅力語る

コーディネーター 鈴木啓史(奈良) 申し込みを是非してください。

◆7月例会 戦後責任 地球時代(仮題) 提起 井上

リアル・ハイブリッド 同時開催の予定

◆夏の大会

8月8.9.10日 オンライン・大東文科大学

大会プレ集会 6月11日 大東文科大学・オンライン

京都教科研4月例会報告

2022/4/19

民間研で学びつなげる教師

提起 吉益

(梅原利夫論文の要約) 民主教育研究所代表 教科研常任委員

戦後日本での民間教育研究運動 pp61-62

戦前から戦後へ 中内、碓井の指摘 民間教育研究運動(民間研)の歴史 戦後の再生
日本教職員組合 全国教研と連動 日本民間教育研究団体連絡会(民教連)の結成 47団体
その背景 3つの要因

- 1、「こころならずも協力させられたことへの反省」戦前から戦中
- 2、全国教研との連動
- 3、「教育の逆コース」の動きに抗する

民間研に参加し学び合う教師 pp63-64

その特徴

- 1、出入り自由 個性的、魅力的な実践者、研究者
「同志的な人間関係」と強力なリーダーシップ

2、日常的な定例研究会と集約としての全国レベルの集会の開催

3、研究の成果を意識的に学校内に交流 還流

切実な3つの要求

- ①明日の授業に役立つ情報や教材のヒント
- ②悩んだ時に親身に相談にのってくれる仲間の存在
- ③教育とは何か、そもそも論の追求

※教職員組合運動の2つの柱

教育労働と教育条件の改革運動と教育実践研究運動

中尾さん(香川) 山住氏の語り

教育研究の変化と民間研の拡張

1970年代の最盛期

丸木正臣。川合章(日生連)大槻健(教科研)らの魅力的なリーダー 機関雑誌の発行

1990年代後半からの停滞、長い低迷期

- 1、夏季全国集会での参加者の減少
- 2、機関雑誌発行の困難
- 3、次世代のリーダー層の継承(リーダー層の高齢化)

教育委員会など教育行政による研修政策の管理強化

- 1、義務化された年次研修(民間研と日程が重なる場合も)
- 2、初任者研修の異常さ
- 3、人事考課制度の導入

職場の多忙化とICT化による日常生活の変化

わざわざ研究会にでかけなくてもいい、機関雑誌を定期購読する必要性がない。

手軽で即効性を求める。TOSSや「教育セミナー」の普及

創造型研究から消費型研究への流れに

いま民間研でつながる意味

「切実な問いと要求」は増加し、深化している。

そもそも教育とは何かと問いは絶えず生まれている。

切実な問いを探求し、交流し、深めあう仲間と組織の存在は、どうしても必要。

※新たなつながりの模索と創造が求められている。

研究的実践者と実践的研究者が連携する文化を築く。

第2特集 他の論文 報告

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| ○藪内論文「安心して自然体でいられる場」 | 葛飾作文の会・教科研で |
| ○太田論文「41歳の教師道」 | 札幌作文の会 若手教員と「教師を楽しむ会」 |
| ○磯田論文「サークル活動で学び合うこと」 | なら音楽サークル |
| ○寺尾論文「若者からみた民間研」 | 「2009年型教職」 |
| ○金馬論文「民間研に参加し続けるまで」 | 日生連 教科研 |

梅原論文の感想と京都教科研30年のあゆみをふりかえって

梅原論文から民間研の歩み、課題がよくわかった。2009年型教職観との関連？で、切実な要求とは何か、その上で新たなつながりと模索について問いをもちました。京都教科研30年のあゆみから考えてみたい。

2009年型教職観 日本教師教育学会第19回研究大会から 門脇、油布報告

- a) 仕事と私生活を切り離して割り切り
- b) 教師としての自分の仕事の範囲を限定し
- c) 管理職の指導のもとで
- d) 学力向上という学校の組織目標の実現に取り組む

「共同歩調志向」教育公務員であることに自己肯定感と生きがいを感じる教師観

例会で論議したい問題提起

◆2009年型教職観の教職員が一定 増える中で民間研 京都教科研が新たなつながりを模索する際、何を継続し、何を考え実行していくことが必要なのか？

京都教科研30年のあゆみを振り返って

※ 教科研、これまでこれからの寄稿された文章を読みながら…振り返ると以下のような事を続けてきたように思います。いくつかありますが、参加されている方の思いや問題意識を自由に語ってみてください。

1、30年前 結成総会で確認したこと。

無理をしない、3人が参加できやすいように。来る人は拒まず、参加を組織することにこだわらない。3人でも例会は毎月開催する。通信を発行する。

334回の例会 351号の通信発行 HPの開設 若者とのつながりの模索

2、1年に1回は京都市内で開催。後の関西教科研の原型を作る。

毎月の例会を大事にしつつ、1年に1回はイベント的に企画する。

3、ひとつの方法、思想、理念にこだわらない。常にそもそも論を考える。

現場と研究者の自然体の論議を大事にする。

野中代表 今滝さん そして佐藤年明さん

研究者の生き方、学びから刺激を受ける。

4、京都教科研としての特別な発信はしないが、関西教科研、全国規模の講座の学習会は企画しよびかけてきた。

連続講座の開催(講座出版にちなんで) 12月特別例会などを企画

5、東京の教科研常任委員会に協力するが忖度はしない。いいたい事ははっきり言う。

地域の発信を大切に。関西、京都の今から考える。 東京、常任委員会に連帯する。

おかしいと思ったら遠慮せずに発言するスタンスを大切にする。

※1～5は事務局でゆるやかに共有していることだが、参加される方の思い、「期待」は様々な違いがあると思うので、問題提起とからめて発言してください。

その上で30年をふり返り、次に繋げていきたいと思います。 よろしく願いいたします。

例会討議・発言など

※発言要旨です。録音のおこしではないのでご容赦を(文責 吉益)

- 野中 ここにくるのが楽しみだった。しんどい事にアプローチしてきた。カント 悪に向き合う。悪と向き合い 自然につながる。現場から学ぶ それが教科研 オルグの力感心している。
- 大西 30年 そんなに変わってないようにおもう 刺激がもらえる。色々な話が聞ける。管理統制のなかで学び続けてきた。 サークルが衰退する中 細々と続いている。周囲に広げられなかったが原則を大事にしつつ若い人にどう接近していくか。模索の段階 現役世代に働きかけを。組合の学習会がサークルのようになっている。結果的に、金太郎あめてき参加者が重なりサークルに来る事がしんどいのも現状。
- 井上 30年長いようだが生活の一部になっている。同じ共感 その繰り返し、職場のガス抜き 次のエネルギーになっていた。定年まで続けられたのは 地域性を大事にしてきたから。自分のために続けてきた。運動団体ではないので、背伸びせずに楽しく続けてきた。これが本来のサークルの形ではないか。テニスサークルにも参加しているが健康テニス、仲間と会える、楽しいから続いている。続くひとつの方程式？があるのでは。若い世代につなぐ？病院でもやる？自分たちが楽しければいい。これが基本。 歴史資料にしたい。 地域に残す。 社会教育実践として残すことを考えたい。
- 佐藤 地域の活動に興味があった。兵庫教科研の思い出 宮城でも イベントも模索していた 三重の活動 毎月の例会 だんだん衰退していった。授業づくりが中心 断片的に参加している。京都の例会は 重要な学びの場である。過去の論文を読んで参加しよう。連載で還流している。 37年間の大学教師生活 今からしっかり学びたい。例会 通信に掲載してもらっている。
- 河内 今の先生はそれなりに苦勞されている。教育とは何かを常に考えたい。例えば 市川伸一を講師に学習会などが組織されている。若い世代との違い。若い人は私たち以上にしんどい、必要なアシストがいるのではないかと思う。
- 寺井 サークルは国語など教科の側面が中心だった。ここは そもそも論が中心 授業そのものを検討する事はあまりないと思うが。身近で大事なものとして今も続いている。地域性が大事では。続ける原動力ではないか。参加していて気になるのは、みんながどのように励ますことができるか、支え合う。これがサークルではないか。ネット情報よりリアルな意味はある。現場の苦しみをどうするのか、いつも重く聞いていた。若い人たちを励ます意味がある。サークルには期待している。京都はユニークな存在、継続して次の道を模索していく。継承とは何か、若い人がやりたいように支援することだと思う、共感して聞いた。

中尾 京都の教科研 のような感じは香川にはないが。困った時に参加する。教育を読む 全国大会に参加する。困った時に相談する人はいた。高知の教科研に参加 全国レベルで学習できる。関西は時々 参加している。今回はZOOMで参加できた。例会は 本質的な事を考える場。若い人とのつながりが今はない。どうつながっていくか。コロナ禍で模索している。今 社会福祉協議会にかかわっている。学生がサポートしている。

芦田 京都とは5年のつながりですが。重要なポイントがある。30年も続いてきた。楽しむということがポイントではないか。 研究することを楽しむ。3人の存在が大きい。継承？違いがあるけど適度に調節できるすばらしさ、 ばらせるのが自然だけど。そこに教訓があるのでは。話し合うことは楽しいで。伝える意味がある。 リモート会議も大事にしつつ。相互の意思疎通はリアルで、統一をして続けてほしい。

河内 3人みな違う、そこがいいのでは。ZOOM参加よかった。 集音マイクの工夫していただければありがたい。

※色々な角度から意見をいただきました。大変 参考になり次の方向がみえてきました。 同じような世代の3人だったので続けてこられたともいえますし、今後、若い世代との接近は オンラインなどの工夫で広めていきたいと思えます。ただ未来の方向は若い人たちの感覚ですきなように進めてもらえばいいのではないかと考えています。あまり気負わず自然体でゆっくり楽しみながら続けていけばとあらためて思いました。オンライン環境もそれなりに工夫してみようと思いました。

連載・私の研究ノート（第14回）

神代健彦編『民主主義の育てかた 現代の理論としての戦後教育学』（2021）（その4）第8章 民主教育論 ― 身に付けるべき学力として（中村(新井)清二）

【5回中の1回目】

佐藤 年明

連載第10回からの「私の研究ノート」第2ラウンドは、神代編『民主主義の育てかた』（2021）を取り上げさせていただいています。第10回（本通信347号2022.1）で「はじめに」（神代）を、第11回（348号2022.2）・第12回（349号2022.3）で第7章神代健彦論文を取り上げました。

実はこの第2ラウンド連載には「元ネタ」があります。私が2021年8月に開設したブログの中で「教育学文献学習ノート」というシリーズ投稿をしています。この「学習ノート」は、以前はfacebookの私のタイムラインにアップしていたのですが、毎回A4ファイルにして数十ページになる原稿量で、スクロールしていただくだけでも手間がかかるので、別に「佐藤年明私設教育課程論研究室のブログ」（<https://gamlastan2021.blogspot.com/>）を開設し、facebook上からもリンクを張ることにしました。「教育学文献学習ノート」自体は2020.8.26にスタートしたのですが、初めてのブログへの投稿は「3 教

育学文献学習ノート(22)-1 神代健彦編『民主主義の育てかた 現代の理論としての戦後教育学』(2021)はじめに(神代健彦)・第8章 民主教育論(中村(新井)清二)」(2021.9.3)です。この投稿の後半・第8章の部分が、本通信での今回・次回の連載の「元ネタ」ということになります。初出ではない(既発表の文章を再構成した)原稿を掲載するのは、読者のみなさんに対して失礼に当たるかもしれませんが、私の研究作業としては、まずは神代編『民主主義の育てかた』の各論文について、自分の思うまま、字数など気にせずに自由にコメントを書くことが必要でした。ブログ投稿のうち第8章中村論文に関する文章も、A4ファイルにして20数ページに及んでおり、当然ながら京都教科研通信各号に全文掲載することはできません。連載では文章量を大幅に圧縮していますが、それでも昨年末まで1ページ半程度だった私の連載が今年第2ラウンドに入ってから2ページ半~4ページに膨らんでいます。2022年3月例会での神代氏報告が昨年中に決まっていたので、それまでの連載で神代論文について紹介・コメントすることにしたのですが、神代論文の行論をきちんと追いつきながらコメントするとなると当然3月例会までにみなさまにお届けできる連載2回分には到底収まらないためそれはとても無理だと判断して、私からの神代論文への2点の質問だけに絞って書きました。それでも原稿量が前述のように膨らんでしまいました。

「教育学文献学習ノート」では私なりにかなり丁寧に著者の行論を追いつきながら自分のコメントを述べています。私のブログ投稿を読む人が私が検討している論文自体は読んでおられないということもあり得るので、もちろん著者に成り代わることはできませんが、論旨もきちんと紹介した上で自分の意見を対置することが礼儀だと考えます。しかしこれまで述べたように、本通信の連載では、各著書・論文著者の論旨を丁寧に紹介した上で自分の意見を述べることは不可能です。となれば、検討対象である著書・論文の全体については、通信の読者のみなさんがもしご関心があればご自分で読んでいただく、ということになります。ただそのように割り切ってしまうと、一教育学研究者である私が自分の研究関心の一端を披露するこの連載は、果たして京都教科研通信の構成部分として意味があるのかという自問にぶつからざるを得ません。すでに14回を数える連載ですが、そういう悩みの中で書いています。

上記のような私のもやもやした思いで紙面を使ってしまうのもどうかと思いましたが、私としては触れておくべきことだったので敢えて書かせていただきました。さて、中村論文の検討を始めましょう。実は上記のようなもやもやを抱えながらも、前々回・前回連載での神代論文検討に倣って中村論文も連載2回分に収めようと当初考えていたのですが、「教育学文献学習ノート」から連載への書き直し作業に取り組む中でどうしても2回では足りないと思うようになり、結局全4回を充てることにしました。

中村論文の構成は以下の通りです。

- 1 民主主義が教育実践の内側に入り込む
 - 1、教育学のことばでない「民主主義教育」
 - 2、城丸章夫の民主教育論
- 2 城丸の教育課程論と学力概念
 - 1、「学力と人格」問題
 - 2、思想と行動能力の統一的把握
- 3 城丸の民主主義教育論からさらに考えたいこと

最初に本章における中村氏の課題意識に関わる部分を抜粋します。

【はじめに

学校あるいは教育と民主主義という教育学のテーマがあります。しかし、21世紀の日本社会にとってこのテーマが大切であることは言わずもがな、ましてや教師ならばその重要性を十分に心得ているはずのこと……と試みてみたところで、虚しく響くかもしれません。】(P. 202)

【民主主義が一人ひとりの存在を大切にするとともに生きやすい社会の基本であるならば、毎日の教科書で子どもたち一人ひとりを大切にすることに民主主義という名前が与えられていても良いはずですが。ところが、日々の仕事と民主主義を結びつける発想は、試してみれば「非常識」であるようです。(中略)にもかかわらず、「民主主義が教師の関心の外にある」としたら、このことはなにを示しているのでしょうか。教育と民主主義のつながりについて関心を持っていない教師の意識の(強いていえば専門性の)なんらかの欠如を示しているのでしょうか。それともそのように教師の卵を育ててこなかった教員養成の欠陥、あるいはそれを担うそれぞれの大学教育の課題でしょうか。あるいは、それを忘却させる日々を強いる教育行政施策の様々な無理でしょうか。】(P. 203-204)

⇒ 私自身、40 数年教育学研究と教育学教育に取り組んでく中で、民主主義教育あるいは民主教育とは、教育の理念・実践・制度など教育全体をカバーする「望ましいビジョン」として、その基盤は日本国憲法において保障されているが現実においては極めて不十分にしか実現されておらず、現在から将来にかけてより完全な実現をめざすべき教育の理想として、要するに「目指す教育の全体的ビジョン」と捉えており、教育の各具体的局面において民主主義を担う主体の形成をどのように行なうかという発想は弱かったと思います。私が、不十分にしか実現されていないけれども教育の必須の理念だと考えてきた民主主義教育、教育における民主主義は、実は子どもにとっても教育にとっても「常識」でもないこと＝「非常識」であるという中村氏の指摘にははっとしましたし、耳が痛いです。現実を冷厳に踏まえた教育実践や教育学を作ろうとしているかと問いかけられているんだと思います。

次に本章の構成について、中村氏は以下のように説明しています。

【本章では、公教育制度と実際の教室にまたがっているはずの民主主義をテーマにし、一人ひとりが大切にされる民主主義の学校の形を考えたいと思います。以下、本章の流れを示しておきます。

1960 年代、民主主義の教育という理念が、まず制度的側面から追求されてきたこと、その中で「教育過程の内部」の民主主義を追求することが研究課題として自覚されていったことを確認します(第1節1)。そして、教育課程における教科外教育論を展開しながら、この課題に取り組んだ城丸章夫の仕事を紹介します(第1節2)。

その上で、城丸の民主主義教育論が持つ現代的な意義について述べます。その意義は学力論にあります。民主主義が「教育過程の内部」に入ったかどうかは、民主主義を子どもたちが身につけたかどうか、言い換えれば、学力になったかどうか、あるいは学力とどう関係するのか、ということと繋がっているからです(第2節1)。ただし、城丸が民主主義の教育を論じたことは知られていますが、学力を論じたとは一般に受け止められていません。よって、城丸の学力概念を描く必要があります。私見ですが、城丸の教育課程論をよく読んでみると、そこに学力概念が潜んでいることに気づきます。そのことを紹介したいと思います(第2節2)。

最後に、城丸の民主主義教育論からさらに何を考えないといけないのか、断片的にはなりますが、戦後教育学の代表的な学力論である中内敏夫の論との関係で、触れたいと思います(第3節)。】(P. 204)

ここで本連載冒頭に言及したことに戻りますが、上記のように中村氏自らが解説しておられる本章の行論の全体を丁寧に辿ることは本連載ではできません。そこで大変申しわけないのですが、第1節の検討を全面的にカットし、第2節で検討されている城丸章夫の民主主義教育論・学力論・教育課程論に関心を集中します。この限定は全く個人的理由によるもので、その理由とはこの「教育学文献学習ノート」シリーズの3つ前、石垣雅也「授業・学習指導における『子どもの事実』をつかむ方法意識—城丸章夫の指導論を手がかりに—」の検討において、石垣氏の解釈をめぐりつつ城丸理論の学習に取り組んだ（そして結果的には行きづまり、放り出してしまった）という経緯があるからです。

1 民主主義が教育実践の内側に入り込む

1-2. 城丸章夫の民主教育論

城丸の原典についての中村氏の丁寧な紹介・解釈の行論を省略して、末尾部分での中村氏のコメントのみを紹介します（引用された原典を読まないという意味が理解できない部分は（中略）として割愛させていただきました）。

【民主主義にとって人々が集団の組織と管理の能力を身につけることが欠かせない、という教訓の媒体（「同じ」をつなぐもの）として城丸が主体として考えていたのが自治活動です。（中略）

城丸は「教育的指導」を追求した研究者でした。「教育過程の内部」に入るということは、そこに意識的な働きかけが存在するということです。（中略）その意味では、自治活動は、子どもたちが組織と管理の能力を身につける媒体であるだけでなく、教師の働きかけの媒体でもあるのです。その転化を推し進める働きかけの方法が生活指導であり、具体的には、自治活動を通じた「学級集団づくり」と呼ばれる実践形態でした。（中略）付け加えれば、城丸においては、生活指導の「現実性」を保証するものとして、教師自身の民主勢力としての経験が示されています。教師自身が自分の生活・職場に民主的に関わり、「苦勞してもがきながら進む」ときに得た教訓が、自治活動を転化の媒体とする生活指導の現実性を保証するというわけです。】（P. 214）

2. 城丸の教育課程論と学力概念

本節における中村氏の課題設定は、以下の通りです。

【さて、このような民主主義教育の理論はどのような現代的な意義を持つのでしょうか。わたしは、一つには「学力」概念との関係でその意義が浮き彫りになると考えています。なぜなら、民主主義が「教育過程の内部」に入ったかどうかは、民主主義を子どもたちが身につけたかどうか、言い換えれば学力とどう関係するのか、ということと繋がっているからです。】（P. 215）

⇒T. Satou : 城丸を引き取ったの中村氏のこの課題設定は興味深いです。城丸は日本社会における民主主義運動の「闘争の教訓」に学び、それを「生活指導」という形で「教育過程内部」に引き入れ位置づけた。そして中村氏は、それが成功したかどうかを「学力」形成において検証しようというのです。学力形成は教科指導で、行為行動の形成は生活指導でというような単純な領域区分論は現実には即していないことは私も理解していますが、それでも常識的には教科学習をメインのフィールドとして形成されると考えやすい「学力」を敢えて民主主義教育の成否をはかる焦点と捉えるというのはおもしろいですね。

2-1. 「学力と人格」問題

中村氏は2010年代以降の教育政策を批判して次のように述べます。

【こうした問題の中でもその最たるものは、「学びに向かう力・人間性等」という文言です。「人間性」という文言は重大です。どのような人間であるべきか、その内容を国家が法令などにおいて扱うことは、20世紀の二つの世界戦争を経て、強く戒められてきたからです。】(P. 216)

【「資質・能力」という学力モデルは、それが人格に相当するまでに膨張することを妨げません。学力がそのまま人格と重なってしまうのであれば、学力テストによる数値評価が当然視される今日の状況下では、人格が測定可能で、評価可能であるような、そういう酷い誤解を招き、ひいては学校教師に人々の人生の選別を許すという甚だしい過ちすら招きかねません。】(P. 216)

そして中村氏は、教育基本法に教育の目的規定として「人格の完成」と書かれていることに言及しつつも、以下のように注意を喚起します。

【確かに、大きくは、教育は人格形成にかかわる営みです。それでも人格と学力を結びつけることには慎重さが求められるのです。なぜでしょうか。

人格を人格たらしめているものの一つに「思想」というものがあります。思想は、誰にも奪われてはいけなく、そのひと自身であることの根本的な要素の一つとされています。民主主義社会では、基本的人権として思想・信条の自由が保障されているのです。

どんなひととも思想を持っています。思想をもたない人などいません。子どもであっても子どもなりの思想を持っています。そして、どのような思想をもつかは、その人の自由として保障されなければならないのです。そして、これは、現代社会の教育の基本原則です。人格の完成を、あくまでも大きな方向として、目指しつつも、子どもの思想の自由を私たちは厳に保障しなければならないのです。この原則から見ると、この「資質・能力」論には、思想の自由の保障という視点が欠落しているのです。】(P. 216-217)

さらに中村氏は中内敏夫による「教育」【人格形成に関わるとしても、個人の思想の自由を保障することに注意を払う文化・科学の伝達のあり方】と「教化」【個人に優先して既存の社会集団の都合を優先するあり方】(P. 217)の区分を紹介し、「資質・能力」は【「教育」ではない可能性が濃厚】と指摘します。

こうして最近の教育政策動向を批判しながらも、中村氏は【この学力と人格をめぐる問題は、「資質・能力」論に特有の問題ではなく、先例があります。】(P. 218)として、次のように述べます。

【この問題は、民主主義の教育と不可分の関係にあるのです。民主主義も「思想」だからです。民主主義教育論がかつて熟考した学力と人格をめぐる問題を再訪することは、「資質・能力」の育成を求められて困惑する教師たちにとってきっと手掛かりになるはずです。】(P. 218)

そして中村氏は、【私の見るところ、民主教育を追求した城丸は、この問題を視野に入れつつ、教育的指導を具体的に明らかにしようとした教育学者でした。】(P. 218)と指摘し、そのことを坂元忠芳『学力の発達と人格の形成』(1979)における以下のような城丸評価によって裏づけています(佐藤註・以下の部分は坂元からの引用ではなく、中村氏による解説です)。

【城丸は、まず、1960年代当時の「人格」概念が教養主義的であり、加えて人権意識、労働能力、さらに社会的行動能力などを欠落させていることから、主知主義的であると問題視しました。

ここでいわれる主知主義的な人格把握とは、人格を、認識と行動という能力のうち、認識つまり「知」を主体として捉えようとすることです。その問題とは、人格形成をもっぱら思想とそれを構成する認識

の形成として捉え、そのために、思想が一定の人間関係のなかでの行動の変化と結びついていることを軽視してしまったことです。城丸は、これを問題とし、60年代の人格形成論における一面性、すなわち「陶冶〔認識の指導〕だけで人格を変えることができるという一面性」(坂元 1979:224)を批判したのです。そして、思想(認識)と行動能力の両者を切り離さずに、なおかつ行動能力との関わりで人格形成を構想すべきだと主張しました。坂元は、城丸のこの方向性が、従来の民主教育研究内にあった人格理論の主知主義的傾向を批判する重要な観点だった、と評価しています。】(P. 219)

2-2. 思想と行動能力の統一的把握

(1) 思想と行動能力の統一としての人格

中村氏が紹介している以下の2つの引用は、城丸が執筆したと思われる全生研常任委員会『学級集団づくり入門 第二版』(1971)の「生活指導の目的」の一部です。

【思想と行動能力との統一されたものが人格である。人間はこの両面を発展させるとともに、絶えずその統一をめざさなければならない。そしてこの統一にあたっては、社会的行為・行動は決定的に重要である。なぜなら、いかに行為・行動するかこそが、彼の思想の決着をつけるものだからである。思想は行動を導きつつ、行動において実証をもち、社会的責任を負うものとなるからである。しかも、行動は一定の行動能力なしには成立しない。】(P. 220 原著 P. 25)

【民主的思想と行動能力を発展させるものは、民主的行動そのものである。行動において行動能力が形成されるだけでなく、行動は思想の産出者であり、思想のもつ抽象性や一面性に対して具体的であり豊富であり、思想を支えつつ思想をのりこえる性質をはらんでいるのである。】(P. 221 原著 P. 25-26)

さらに中村氏によれば、城丸は「生活認識と価値観の形成」(1967)の中で思想(子どもの)について以下のように書いています。

【子どもの人格形成を考えた場合に、思想の形成ということがたいへん重要なものとなる。ここで思想というのは、既成のあれこれのイデオロギーという意味ではない。さしあたり、子どもの見方・考え方のことだとしておこう。ようするに、子どもは子どもなりに、現在までに持っている認識を、何らかの形で概括し、それなりに事物についての見解を示す。それは、「お母さんは苦勞している」とか「自動車が通る道は危険だ」とかいうふうに「母」とか「道路」という局限されたものについての概括に始まって、次第に自然や社会についての統一した見解に近づいていく。】(P. 222 原著 P. 173)

⇒ ここで私が40数年前に卒業論文「社会科教育における児童の認識形成過程についての検討」(1977)に取り組んでいた頃の記憶が蘇ってきました。鈴木喜代春『社会科の新しい研究授業』(1960)で紹介されていた子どもの作文に見られる認識の事例です。高度成長が始まり農業の機械化も進行する中での農家の小学生の話です。当時はまだ牛を飼う農家もあり、牛糞は肥料としても活用されていました。しかし牛に代わって機械を導入した農家もあり、その子の家には牛はいません。そのことについて、その子は「牛ボロ(=牛糞)ないから、おらの家は景気が悪い」と書くのです。牛を飼うと牛ボロが取れる→でもうちの家には牛がおらず牛ボロが取れない→だからうちは景気が悪い、というわけです。この子どもの認識の世界には農業機械化の事実認識が含まれていません。だから社会科の学習の視点からは「一面的な認識」と捉えることもできるのですが、しかしこの子が「牛ボロ」と「景気」を結びつけてわが家の経済についての一つのまとまった認識を形成したことはまちがいないですよ？ 誤謬を含んでいるけれども、自分を取りまく世界の事実と事実を結びつけながらあるひとまとまりの「概括」(城丸)を形成し、「事物についての見解を示す」(同)。そういう思考の働き(の積極性)に注目し、高く評価すべきではないか。卒業研究当時、私は城丸を読んでいませんでしたが、城丸の言う子どもの「思想」と、私が注目した子どもの認識の働きとは、それほど遠くないように思います。

私は卒論「第二章児童における社会認識の発達と学校教育の役割 第二節学校教育における社会認識の指導」の中で、教育科学研究会第4回全国研究集会(1959)「社会と認識」分科会の議論を紹介して、以下のように書きました。

「1959年の『社会と認識』分科会で提起された仮説においては、社会認識の発達の筋道を、児童の『生活経験に基づく認識から出発して高次の社会科学的概念*』に到る過程としてとらえられていた。そこでは、児童のありのままの生活経験が『社会認識の端緒的形態*』として重視されていた。たとえば、『おらの家は景気が悪い。*』という児童の作文における表現には、社会的な経済構造の中に自分の家の経済状況を位置づけようとする認識活動であると考えられた。児童の社会認識に関しては、彼らの視野が地域の生活に『釘づけられ*』ており、さらに彼らが家庭の文化的、経済的環境の影響をさまざまな形で受けているために『かたより、ゆがみ、分裂、混乱』を持っていると考えられた。故に、いきなり科学的概念を学習に持ち込んでも、『子どもの現実との間に隙間を作る*』ことになり、詰め込み教育に終わる危険があるとされたのである。」(*印の引用箇所の出典は全て、大槻健「『労働』概念の形成と科学的認識」(『教育』No. 109))

卒論執筆当時、京都大学教育学部図書館所蔵の『教育』バックナンバーをコピーしまくってかなり広範囲に手元に置いていた教育科学研究会関連の論文や報告資料等も、その後の職場の異動や研究関心の変遷の中で多くを手放してしまいました。書齋を探してみましたが、上記の大槻報告は発見できませんでした。「おらの家は景気が悪い。」という子どもの一言は正確に覚えていましたが、1959年の教科研「社会と認識」分科会でそのことを報告したのが私の記憶通り鈴木喜代春氏なのかどうかは確認できません。また大槻による分科会討論の記録全体を正確にトレースすることもできません。ですからあくまで私の卒業論文のレベルでの理解をくり返すこととなりますが、「おらの家は景気が悪い」に見られる子どもの認識がありのままの生活経験に基づく「社会認識の端緒的形態」と位置づけられ、社会的な経済構造の中に自分の家の経済状況を位置づけようとする認識活動であると考えられたのです。そこには、「かたより、ゆがみ、分裂、混乱」があるけれども、そこにいきなり科学的概念の学習を持ち込んでも「子どもの現実との間に隙間を作」り、詰め込み教育になると警鐘が鳴らされたのです。

残念ながら1960年代に入って教科研の社会科学研究では上記のような生活現実に規定された子どもの認識を丁寧に指導する考え方は受け継がれませんでした。それはまた戦後民間教育研究運動における大きな総括課題だと思います。

1950

年代後半の教科研においては「認識」「社会認識」に関わる問題として議論が行なわれたのですが、城丸は子どもの「思想」の問題と位置づけています。(続く)

私と教科研

全国委員 中尾 忍(香川県)

私が教科研や雑誌『教育』の存在を知ったのは大学生の時です。私が藤岡貞彦ゼミに所属していた頃、藤岡先生は教科研事務局長の時期ではないかと思えます。「教育を人間の場に、教育の場に人間を」との提起が行われたのは1978年の教科研大会。ちょうど私が大学を卒業して、香川の教壇に立った年です。そう考えると、教科研とのつながりは、その後香川県の中学校社会科教師の38年間、そして今退職して6年目を迎えるので45年以上ということになります。

私が卒業論文で、『香川の教育体制批判・学テ教育体制批判』を書いた時も、大田堯の『学力とは何か』と雑誌『教育』を参考にしました。

また、教師になって、原稿を書かせてもらったり、全国委員・全国編集委員を引き受けてさせてもらったりして、雑誌『教育』・教科研とのつながりは深くなっていきました。

全国大会にも何度も参加して、特に高知大会には香川から3名で参加しました。

教師を続けることができたのも、教科研のおかげと言っても言い過ぎではないでしょう。

雑誌『教育』はHow toものではなく、すぐに役立つというわけではありませんが、原理・原則をしっかり学ぶものでした。自分が教師生活を続けていく指針でした。

京都教科研・吉益さんとの出会いは1995年、私が香教組書記長の時。吉益さんに香川県に講演に来てもらい、テーマは「子どもたち、父母とのつながり」でした。『子ども、親、教師 すてきなハーモニー』の本が出された時で、それ以来ですので、吉益さんとのつきあいも25年以上になります。

その後、京都でも小講演をさせていただいたこともあります。

私が学年主任時、生徒が「荒れ」、教師を辞めようかと思い悩んだ時も、雑誌『教育』に赤裸々に書かれた吉益さんの文章に励まされ、電話で相談させていただきました。

京都教科研30周年。おめでとうございます。粘り強く、地道に活動されていることに敬意を表します。ますますのご発展を願っています。いつか、乙訓教育会館での「読者の会」にも参加したいと思っています。

中尾さんは今回の例会にも参加していただきました。関西教科研の集會に香川から何度か参加していただいています。香川の研究会に参加した時、わざわざ時間をとっていただいて色々案内していただきました。情のある方です。中尾さんの現場で生きる、教師魂から何度も学ばされました。

※通信の感想、ひとことなど遠慮なく事務局までお願いします。この文章は岸本さんの了解を得て掲載しています。

(略)それはともかく、戦後教育学に対する評価には驚きです。古い左翼のイデオロギーとまで言われてしまうと、悲しくなってしまう。私は大学3年生の時、堀尾輝久氏の「現代教育の思想と構造」を読んで、卒論を「教科書裁判」を題材に、教育権は国民にあることを論じたのです。教員になってからは、その卒論で書いたことを何とか実現したいと呻吟してきたのです。まるで、自分の教員人生を否定されたように感じました。

それに代わる教育学が今あるのでしょうか。私の後輩の何人かが今校長になっているのですが、教育学を持っているようには思えない人が何人かいます。彼らは市教委や県教委をウロウロ往復して校長になったのですから。そのうちの一人が研究主任になったとき、引用文献に週刊誌を用いたのにはあきれたことがありました。

事後研の校長の指導助言の際に、「今日の授業は子どもたちの声が大きくて良かった」と言い、授業者のひんしゆくを買ったという話もあります。教育学を持っていなかったら、自分の授業実践の方向も見えてこないし、他人の授業や教育実践を見ても、評価の基準が定まらず、批評もできないと思います。ある程度経験を重ねると、自分自身の教育観ができてくると思いますが、普遍性に難点があると思います。

2.2の佐藤氏の意見はよく分かります。そのためには、丁寧な事後研を積み上げていく必要があると思います。それでも、経験だけでは限界があり、深まらないと思うのは私だけでしょうか。佐藤氏の逆質問は、私も同感です。

小川太郎の《子どもはランドセルと一緒に生活を背負って学習に来る》という趣旨の言葉です。私は小川太郎さんの最後の受講生の一人となりました。小川さんの名声を聞いて、多くの学生が授業を受けたのですが、その声はか細く、迫力のないものでした。翌年に亡くなられたと知り、病を押して教えてくださったんだと感じました。小川さんの講義記録を教員になってから数年後に読んだのですが、すぐに役立つことばかりで、驚いた印象を持っています。彼は現場の教員や子どもからも、深く豊かに学んでいたのだと思います。

取り留めの無いことを記してしまい、申し訳なく思っております。

村の中を2時間かけて野草調査をしてきました。70種類以上の野草が生えているのです。田の畦は緑と赤や黄色、白や紫の模様のある絨毯です。きれいです。それに、ヒバリやスズメ、ヒヨドリやウグイス、モズやセグロセキレイ、ジョウビタキなど野鳥の声も響き、のどかです。

一日の気温差の大きい昨今でございます。くれぐれもご自愛ください。

岸本さんは小学校の教師を退職されて、いくつかの大学で学生たちに講義をされていました。今は農業をしながら地域とのつながりを大事にしつつ、生涯学習として総合学習や地域の掘り起こし、研究をされています。通信に対する感想をいつも丁寧にかいてくださり感謝しております。神代さんらの研究に敬意を表しながら、今、戦後教育学を真摯に学ぶ大切さをかたっておられます。私たちはポストモダンの流れに迎合するのではなく戦後教育学を丁寧に学び俯瞰していくことが重要だと思えます。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

①近現代日本教員史研究 船寄俊雄・近現代日本教員史研究会 風間書房
2009 年型教職観をもつ教師が増え生きがいを感じていると報告されている。近代からの教職の歴史を丁寧に分析し、実践検討からこれからの教師論について問題提起された労作。対比としての昭和レトロ型教師の再構築という提起も面白い。

②危機の時代と教師の仕事 山崎隆夫 高文研
6 月関西教科研で話していただく山崎さんの論文集。子どもとの具体的なやりとりを読んでいるとその場面が想像できて何度も涙がでてきてしまう。けれどその涙は小さな希望につながる涙でふっと力がわいてくる。

③ある哲学者の軌跡 岩倉博 花伝社
『古在由重と仲間たち』がサブタイトル。古在の思想は変わらなかったが組織を離れた経過も詳細に描く。6 年の歳月をかけ取材や記録から書きおろした古在の生き方の記録。マルクス主義哲学者として矜持を貫いた足跡がわかる。思想は冷凍保存を許さない まさに名言である。

〇とんび 重松清原作 阿部寛・安田顕・薬師丸ひろ子 日本映画
親（父）と子の成長物語。昭和の香りが全編ただよう。人と人のつながり、情の大切さがあふれでている。それぞれの配役がいい。素敵な映画をみたと実感する。

編集後記・よもやま話

※ウクライナへの侵略戦争。いかに国際世論で独裁者プーチンを包囲するかが問われている。独裁者に未来はない、これは歴史の法則ともいえるが何もしなければ変化はない。

「日本が襲われたらどうする。核には核を」の危険な議論の土壌にのらずに原則的に対処することが問われていると思う。

※オンライン開催を4月例会から試みた。全国から参加自由というのが魅力。あらたな開催スタイルとして模索したい。おおむね好評だったがカメラやスピーカーの機能の充実をはかりたい。参加希望の方は事務局まで。URL 送信します。

※世界ミドル級のボクシングタイトルマッチ。日本の村田は善戦したが敗れた。「試合には負けたが自分から逃げなかったことに満足している」という言葉がさわやかだった。勝者のチャンピオンの謙虚な態度もさすがだなと思った。

※阪神の低迷。「やめる社長を前にしてだれも頑張らない」発言してしまったから辞めるつもりなら投げ出さないでなりふりかまわずセオリーを大事にし、選手をひいきしないで、戦い抜いてほしい。期待にいつもそむかれるけど応援するのが阪神ファンの流儀。

※6月関西教科研の申し込みをよろしく。